第 2 章
インドネシア 2014 年大統領選挙
——政党政治の分析——

本名 純

要約：
ポスト・ユドヨノ時代のインドネシアはどのような人たちが舵取りをしていくのか。とくに大統領にはどのような人物が就任するのか。国際社会が見守るなか、2014 年 7 月に大統領選挙が予定されている。どのような候補者が大統領選挙に出馬する可能性があるのか。彼らの強みと弱みはなにか。選挙政治にはどのような力学があるのか。大統領候補者を擁立する政党の内部で、どのような権力政治が働いているのか。それらを理解することで、2014 年選挙のダイナミズムと新政権誕生後の展望が明らかになってくる。ただ、本稿は中間報告であり、今後の選挙政治の展開によって、最終報告の分析・議論は大きく変わる可能性があることを断っておきたい。

キーワード：
ジョコウィ、メガワティ、プラボウォ、ユドヨノ、闘争民主党、インドネシア、選挙

はじめに——2014 年大統領選挙の意義

今年の大統領選挙は何を意味するか。日本でも同じだが、長期政権が続くと、私たちは「政治の安定」を当たり前に感じ、空気のように存在を問わなくなりがちである。2004 年に誕生したユドヨノ政権の過去 9 年間の安泰は、まさにその感覚を多くの国民にもたらしている。政治が不安定になり、経済や治安に悪影響が出て、国際社会がこの国の行方を心配する。そういう状況は、なかなか今の日常からはイメージしにくくなっている。その意味でユドヨノ時代の功績は大きい。

では「ユドヨノ後」も政治の安定は保証されるのか。答えはノーである。来年の大統領選挙の結果次第で、政治は大きく揺れる。まず大統領が替われば政権のリーダーシップも変わる。与党が替われば目指す政治の方向も変わる。ユドヨノ時代に冷や飯を食っていた人たち

が一斉に活気づけば、これまでと違った力学が政治に介入し始める。こういう変化の末に、政治が安定するかどうかはまったく未知数である。だからこそ、今年４月の総選挙と７月の大統領選挙は、10 年ぶりにインドネシアに大きな政治的転換をもたらす契機として、とても重要な意味を持っている。

同時に、来年の選挙はインドネシアのみならず、東南アジアや東アジアといった地域の国際秩序にも重要な意味を持っている。ユドヨノ大統領の長期安定政権は、インドネシアの外交的な立場を大いに強め、ASEAN（東南アジア諸国連合）の盟主としての役割をアジア地域で発揮する基盤を作ってきた。中国の政治的・軍事的・経済的影響力が東南アジアの地域秩序を変えつつあるなか、日本や欧米は対 ASEAN 外交の重要性を再認識している。とりわけ「ASEAN の一体性」を最も重視するインドネシアの外交的リーダーシップに期待してきた。ユドヨノ後のインドネシアは ASEAN にどのような影響力を持つのか。来年の選挙は、その外交的転機として、地域秩序の行方を考える上でも大事な意味を持っている。

いずれにせよ民主選挙の主役は有権者である。彼らがどのような期待を込めて投票するかで新大統領が決まり、国会の新勢力図が決まる。では有権者は何を求めているのか。ユドヨノ後のインドネシアを舵取りするのはどういう人たちなのか。選挙戦のなかから、その答えが見えてくる。

第 1 節　「ジョコウィ旋風」

では、その大統領選挙の行方を決定づけるものは何か。それは、まぎれもなくジョコ・ウィドド（愛称ジョコウィ）ジャカルタ特別州知事である。この「時の人」が、どう選挙に絡むのか。それが全てと言っても過言ではない。

ジョコウィ人気はすさまじい。昨年 10 月に州知事に就任して以来、彼は次々と州の行政改革に取り組んできた。その成果は賛否両論だが、目に見える「住民本位」の改革姿勢は多くの市民に高く評価され、彼は一躍「庶民派」リーダーとして認知されるようになった。それに伴い、今年に入って各種世論調査もジョコウィ氏を大統領候補として取り上げるようになり、ダントツ人気が立て続けに示されたことで、国内外のメディアも彼を最有力大統領候補として注目するようになった。彼の一挙一動が連日メディアを賑わせ、草の根の支持が全国に広がるなか、政界は怒涛の「ジョコウィ旋風」に戸惑いを見せている。

なぜ戸惑うのか。合理的なセオリーで考えれば、人気者の神輿を担いで選挙をやれば政権が取れる。簡単な話だ。ジョコウィが属する闘争民主党が、彼を擁立して大統領選挙に臨めばよい。その方針を来年４月の総選挙前に打ち出せば、ジョコウィ・ブームに便乗して自党の国会議員候補も大量に当選するし、彼らの選挙活動費も少なくてすむし、次期政権では行

政府も立法府も自党が牛耳れる。勝負は決まり。ライバル政党や大統領候補は、あっけなく撃沈。これがセオリーであり、ジョコウィがその定石に沿って出れば勝利は 120 パーセントであろう。

面白いのがセオリー通りに行かない可能性である。だから政界も戸惑う。おそらく一番戸惑っているのが闘争民主党の党首で元大統領のメガワティだ。彼女は状況をどう見ているか。上記のセオリーを頭では理解しつつも、一方でジョコウィ人気を「脅威」と感じるようになっている。特に党内外にいる彼女の取り巻きたちは、ジョコウィ擁立を阻止すべく、彼女に様々な提言をする。ジョコウィのような新参者を大統領候補にしたら、スカルノ主義を貫いてきた党の存在意義は消滅する。ジョコウィ氏が大統領になったらメガワティの影は薄くなり、2015 年の党大会で党首交代を迫られる。それはこの国における「スカルノの血」の終わりを意味する。そうならないためにもメガワティが大統領選に出馬するのがベスト。このような理屈で彼女を「持ち上げて」説得しようとする試みが急速に強まっている。特に 9 月初旬に開催された党の全国集会で、州支部代表の大多数がジョコウィ擁立に賛成を表明したことで、メガワティの取り巻きは警戒レベルを一気に上げた。

この取り巻きたちは、メガワティに寄生することで、長年、様々な利権と恩恵に授かってきた。彼らにとって、選挙での勝敗よりも実はメガワティが政界でプレゼンスを示し続けることが大事なのである。ジョコウィ旋風はその安泰を妨げかねない。だから脅威に映る。

ジョコウィを出すか出さないか。決めるのはメガワティである。合理的にセオリーで考えるのか。それとも取り巻きに感化されるのか。彼女の思考回路は複雑だ。強力なジャワ人的発想に加え、密教の影響、そしてスカルノ信仰の世界で女王様として長年カリスマ扱いされてきた人の人間観。すべてが彼女の決断に影響を及ぼす。どうでるか。いつ決定されるか。それによって選挙の力学も次期政権の見通しも大きく変わってくる。

第 2 節　「キングメーカー」としてのメガワティ

メガワティ元大統領の取り巻きたちが、彼女を大統領選挙に再出馬させるシナリオを目論む動きは、2013 年末にかけて急速に表面化し、党幹部数人が「大統領候補メガワティ、副大統領候補ジョコウィ」というコンビを擁立する可能性について公の場で話すようになった。それを受けてメディアでも、「メガワティは野心ありすぎ」とか「国民は彼女ではなくジョコウィの大統領選出馬を期待している」など様々な議論が飛び交うようになった。

ほくそ笑んでいるのが他党勢力である。他党の幹部たちは、あらゆるチャンネルを通じて「メガワティ待望論」を彼女の側近に吹き込んでいる。人気のジョコウィの出馬を阻止できれば、他党の得票アップに直結するからである。こういう外部の狙いと闘争民主党内部の力

学が共鳴して、「メガワティ出馬シナリオ」が浮上している。

もちろん彼女が本当に出馬するかはまだわからない。しかも彼女の心中は「野心の有無」だけでは探れない。実はもっと複雑である。それを正確に解読しないと、どのボタンを押すことで彼女がどう決断するかを理解できない。間違ったボタンを押せば彼女も予期せぬ方向に動いてしまう。ジョコウィ擁立を望む勢力は、そのボタンの押し方を間違えないことが大事になる。

ボタンは三つある。ひとつは彼女が取り巻きにチヤホヤされ舞い上がり、出馬意欲を持ってしまった場合に押すボタンである。要は夢から覚めさせればよい。つまりメガワティの人気は高くないし、仮にメガワティ＝ジョコウィのコンビで出馬しても勝てるかどうか微妙ですよ、負けたら国民から総スカンくらいますよ、ということを悟らせればよい。これで夢から醒める。

第二のボタンは、確信的に野心を持っている場合に押すボタンである。メガワティはユドヨノ大統領に過去二回選挙で負けており、以来、口も聞かないほど悔しくてしょうがない。「にっくきユドヨノ」に優越するチャンスが到来し、「いつやるの？今でしょう」と野心に燃えている可能性がある。その場合に押すボタンは、彼女の尊厳を重んじ、政権担当者に舞い戻って多忙で困難な日々を送るよりも「偉大なる国民の母」となり、ユドヨノとのカリスマの違いを見せつけてやりましょうよと説得することである。大統領職や煩わしい政権運営はジョコウィに任せ、自分は彼の後見人として日々全国を周って国民と対話し、「皆に愛されるイブ」として君臨する。ジョコウィに政権を二期やらせれば、これから十年はイブの時代。インドネシア経済の黄金時代にイブは歴史に名を轟かせる。こういうビジョンを彼女に示し、野心の矛先をシフトさせるボタンを押す必要があろう。

第三のシナリオが、やや厄介なものである。それは彼女が「舞い上がり」や「野心」ではなく「保身」を理由に出馬意欲を持つ場合である。過去十年間の野党生活は、実は周りが考えるほど彼女にとって居心地の悪いものではなかった。党内では女王様扱いされ、地方に行けば自党出身の州知事や県知事たちが下僕のように振る舞ってくれる。この現状は快適だ。失いたくない。もし世論に乗ってジョコウィを擁立し、選挙で勝ったとする。間違いなく今後は彼が求心力となる。その時、人は自分を女王様として見てくれなくなる可能性がある。そのリスクがある限り自分が出馬する。負けてもいい。どう転んでも次は国会第一党か第二党の党首として、皆から崇拝され、今の快適な環境を継続できる。彼女がこう考えている可能性がある。

その場合に押すボタンは何か。彼女の地位が不動だということの確約である。ジョコウィが大統領になっても、イブはずっと与党党首として絶大な決定権を持ち、それは絶対に侵害されないというビジョンを彼女に示し、ジョコウィとのパワー・シェアリングが十分可能で

あることを理解させればよい。

メガ氏の心中はどこにあるのか。そして正しいボタンは押されるのか。その神経戦の行方に、次期大統領最有力候補の命運がかかっている。

第3節　様々な可能性

ここまで、今年の選挙の「台風の目」であるジョコウィをめぐる政治の駆け引きについて観察してきた。筆者は個人的には彼が出てくると思っている。とはいえ他の人が大統領になる可能性はないのか。もちろんある。そのシナリオについて確認したい。

メディアでは「世論調査」をもとに、誰が大統領候補として人気があるかを議論することが盛んだが、そもそも、その調査機関で信頼できるものは、かなり数が限られている。現在、ジャカルタだけでも100以上の調査機関が存在するが、多くは政治コンサルタント業を中心とするものである。毎年、各地で地方自治体の首長選挙が何百と行われており、それらに出馬する候補者たちの選挙キャンペーンを請け負って、選挙公約からスピーチ、コマーシャル、街頭ビラなど一連の制作活動をパッケージで売り込むのが彼らの主な仕事である。いってみれば企画屋さんである。この商売は05年の直接首長選挙制度の導入後に大繁盛で、今や一大産業である。県知事候補であれば500万円、州知事選候補であれば1千万円という相場は普通だという。もちろん候補者の知名度や知事職の「旨味」に応じて相場は変動する。ただ、こういう企画屋さんが実施する「世論調査」は、その精度よりも「効果」を狙ったものが多く、いわゆるバンドワゴン効果やアンダードッグ効果といった投票心理戦に重きを置く。そういう調査機関が多いため、コンサルタント業から離れて世論調査だけで勝負できる団体は一握りである。

その一握りの調査機関の名前はあえて出さないが、総じて言えるのは、信頼できる調査を見る限り、ジョコウィの人気はダントツで、次に来るのがプラボウォである。ではプラボウォに勝利の可能性はあるのか。もちろん不可能ではない。プラボウォと言えば、スハルト元大統領の元娘婿として知られ、元陸軍特殊部隊司令官としてスハルト時代末期に国家権力の中枢に君臨していた人物である。当時を知る上の世代の人たちは彼を煙たがる傾向が強いが、「知らない世代」の若い人たちは、彼にナポレオンのような強いイメージを持つ傾向がある。これも彼が抱える米国人コンサルタントが仕掛けるメディア広告の成果でもある。もし、メガワティがジョコウィをジャカルタ州知事に留まらせると決め、自らは他党出身の副大統領候補とペアになって大統領選挙に出馬を目論んだ場合、おそらくプラボウォが勝つだろう。

プラボウォのネックは政党基盤が弱いことである。自ら率いるグリンドラ党の現国会における議席保有率は5%弱である。今年の総選挙を経て、その倍の10%程度には増加すると予

想されるが、それでも大統領選の出馬条件となる 20%までは届かない。抜群の資金力を駆使して他の小党を取り込み、連立を組まなければ条件を満たせない。それがうまくいくかどうかはまだ未知数である。もし失敗した場合、彼は不出馬となる。さらにジョコウィもメガワティが出さない。その場合どうなるか。メガワティとゴルカル党総裁バクリとの一騎打ちになる可能性がある。そんな選挙では、有権者の「しらけムード」が頂点に達し、無投票層が激増するだろうが、結果だけを考えればメガワティが勝利する可能性も出てくる。

つまり、まだどう転ぶかわからないのが現段階である。これは 5 年前と大きく異なる。09 年選挙ではユドヨノの再選はほぼ確実で、彼が率いる民主主義者党がどこまで票を伸ばすかが焦点だった。その意味で今年は違う。様々な方程式が複雑に入り組んでいる。ドラマとしては、格段に今回は面白いといえよう。

第 4 節　秒読みになったジョコウィ氏の出馬

2014 年の 2 月半ば、メガワティ元大統領とジョコウィ・ジャカルタ特別州知事のそれぞれの側近から、「どうやら決着がつきそうだ」と連絡をもらった。メガワティ率いる闘争民主党が、最終的にジョコウィを大統領候補として擁立する。この決定が彼女の口から出たということだった。同年 3 月に入って、徐々にその話しが「噂」として政界に伝わりつつあるが、闘争民主党幹部には箝口令が引かれているため、なかなか具体的な話しがメディアに出てこない。その決定の背景と展望を以下で整理してみたい。

上述のように、メガワティの取り巻きたちは、ジョコウィ人気を警戒してきた。その理由は、彼の人気が高まるほど党内で彼の求心力が高まり、逆に党首であるメガワティのカリスマ性が薄れ、これまで彼女を取り巻くことで得てきた特権や利権が危うくなると考えているからである。こういう人たちが、世間でのジョコウィ人気を横目に、メガワティ氏の大統領選への再出馬を懇願してきた。そのため、彼女自身、党の各地方支部から圧倒的な「ジョコウィ待望」の声を聞く一方で、側近たちからは再出馬に向けての説得工作を受け続け、いってみれば板挟みの状況にあった。

この板挟みをどう解消するか。そのカギは党内の「チーム 11」が握っていた。このチームは、昨年 4 月にメガワティの直下に組織され、大統領選挙に向けての党の戦略を彼女にアドバイスする役目を持つ。党内でジョコウィ擁立の動きと、それを阻止しようとする勢力を睨みつつ、チーム 11 は着々とメガワティへの「アドバイス」に向けてデータを準備し、理論武装を進めてきた。

とくに重視したのは、昨年 10 月から毎月行っている党内世論調査で、今年 2 月までの 5 回分のトレンド・データが蓄積された。また民間調査機関が行っている世論調査も 30 件以

上参考にしている。これらの統計と他党情報を総動員して、2 月半ばにメガワティ党首にかなり具体的な選挙戦略をアドバイスする機会を得た。4 月 9 日の総選挙に向けての選挙キャンペーンが 3 月 16 日からスタートすることから逆算すると、おそらく、この 2 月半ばのチーム会合が党の方針の最終決定の場となることが予想されていた。

チームは３つのシナリオをメガワティに示した。「シナリオ１」がメガワティ大統領とジョコウィ副大統領のコンビで出馬、「シナリオ２」がジョコウィ大統領と党内の誰かが副大統領というペアで出馬、「シナリオ３」がジョコウィ大統領と党外の副大統領候補という可能性である。その上で、チームは、「シナリオ１」を危険だとアドバイスした。7 月の大統領選の第一ラウンドでは優位に立てるかも知れないが、決戦ラウンドでは負ける可能性が大きいと指摘し、避けるべきシナリオだと結論づけた。

これで残った 2 つのシナリオのどちらかという話しになり、２よりも３のほうが現実的であるという意見が示された。これは国会で安定勢力になるためには連立政権を組む必要があり、その連立政党が副大統領候補を推挙する可能性を睨んでの意見である。

これらのアドバイスを受けて、メガワティ氏は、自分が出馬しても勝機が薄いことを客観的に知ったわけである。これまで取り巻きたちから「勝てる勝てる」と賞賛されてきたが、それが幻想であることを知った瞬間だったに違いない。そして、チームのアドバイス通りに党の選挙戦略を打っていくことを最終決定したのである。

現在、党は早急にジョコウィ政権下での政策ビジョンの作成に取りかかっている。これをジョコウィ擁立の発表と合わせて出すことで、党が真剣にジョコウィ政権の下で国家運営を行っていく姿勢を有権者に示そうとしている。メガワティによるジョコウィ擁立の発表は、選挙キャンペーンの前日となる 3 月 15 日に行われる可能性が高いものの、キャンペーンの中盤で発表し、他党がネガティブ・キャンペーンを行う隙を与えないという戦略も議論されている。

いずれにせよ、総選挙前に発表することで、全国各地にいる同党の国会・地方議員候補者たちを勢いづける。その勢いで 30～40%の得票率を目標とする。それが実現すれば、国会内の議席の 35%ほど確保できる。そうなれば連立政党も 1 党か 2 党でよく、コンパクトな政権を実現できる。こういうビジョンを秘め、メガワティの闘争民主党は、ジョコウィをシンボルに掲げて、ポスト・ユドヨノのインドネシアの舵取りに向けて一歩踏み出そうとしている。